

中国河北省承德市平泉県における集団林権改革後の 自然資源の利活用の調査報告

龍谷大学政策学部講師・里山学研究センター研究員
谷垣 岳人

2015年10月30日から11月3日にかけて中国河北省承德市平泉県にて、集団林権改革後の自然資源の持続的な利用の取り組みについての現地聞き取り調査を行ったので、その概要を報告する。

調査日程

- 10月30日 出国、北京市の国家林業局経済発展研究センターにて研究会
- 10月31日 河北省承德市平泉県への移動および平泉県林業局での意見交換
- 11月1日 河北省承德市平泉県の京津風砂源植林&育林国家プロジェクト拠点の視察
- 11月2日 承德市平泉県の杏の種殻を用いた炭生産工場の視察
- 11月3日 帰国

調査内容

10月30日は北京市の国家林業局経済発展研究センターにおいて研究会を開催し、龍谷大学里山学研究センターの取り組みや里山学概念について紹介した。

10月31日から11月2日にかけて国家林業局経済発展研究センターの劉璨主任研究員のコーディネートにより平泉県林業局から平泉県の概況および林権改革の現状について話を伺い、各地で現地調査を行った。

河北省承德市平泉県は、北京市の北東約300kmに位置し、総面積3296km²、人口48万人そのうち農業従事者33万人の中国では比較的規模の小さい地方都市である。平泉県は、温帯落葉広葉樹林と針葉樹林が混じる植生帯で、森林被覆率は58.2%、年間降水量500mmの半乾燥地である。平泉県内の河北省・遼寧省・内モンゴル自治区の境界あたりには、中国の7大河川の一つ遼河の源流域がある。ここには総面積335.5km²の遼河源県級自然保護区が設立されている。遼河源県級自然保護区では、988種の高等植物が確認されており、これは河北省で確認されている高等植物の42%を占める。平泉県の市街地は山地にかこまれた谷筋に広がっており、中心には川が流れ、市街地の周辺部には農地、その先には山が広がる。農地ではトウモロコシが主に植えられており、降水量が少ないので稲は栽培されていない。周辺の山の落葉樹を用いた菌床栽培が活発に行われている。平泉県は食用キノコ産業の中国10大強化地域の一つである。栽培の歴史は三十数年におよび、9大品種60種ほどが生産されている。研究機関も多く、中国農業科学院・中国農業大学・北京林業大学との共同で、食用キノコ産業技術開発センターや北方食用キノコ研究センターや北方林業教学科学研究実践基地を建設している。また平泉県は杏など

の果樹の種殻を用いた活性炭の全国最大の生産基地である。年間総生産は3.5万トンで全国の約34%を占める。2015年には果樹種殻活性炭産品研究発展センター、炭文化産業モデル基地を建設した。また平泉県は、集団林権改革のような国家の林業政策のモデル地区でもある。集団林権改革とは、集団所有林（郷・村・村民小組などによって所有されている林地）の林地請負経営権（使用権）・林木所有権を個別の農民世帯に分配する、2007年から本格的に始まった政策である。2009年からは、林権を抵当資産とする融資制度や林地利用権の譲渡、森林保険制度、造林補助金制度、若齢林及び成熟林の育林補助金制度、伐採限度管理と減税対策など、改革に伴うサポート政策を実施した。この集団林権改革は、今後の中国の森林経営・林業発展の方向性を左右するものとみなされている。

平泉県は2007年から集団林権改革のモデル地区となっている。集団林は、均山（面積割り）、均股（条件の良い土地悪い土地を併せて株に応じて配分する方法。最も公平な分配方法で今後増加するとのこと。）、均利（一旦分配した土地をまとめて貸し出し、利益を均等分配）などの方法で分配された。以下に平泉県の集団林権改革で行われた政策を列举する。①小面積伐採の郷鎮（地方行政）レベルでの許可制。油松、ニセアカシアは20畝以内（1畝は約6.7アール）。②森林管理の技術サポート③公益林・商業林・経済林の分類管理。④林権抵当融資（信用社）。申請→確認→林業局が設立した第三者機関で評価(有料、うち資源調査は無料)→融資。⑤集団林保険（病虫害保険、火災保険。政府が負担）

平泉県の集団林権改革の対象となる集団林面積は161.9万畝で、すでに154.2万畝（全体の95%）が個人に分配された。その結果、自然資源の利活用が活発になった。例えば、ニセアカシア・ポプラを用いた食用菌の菌床栽培、ポプラ植林と合板生産、山杏植栽、杏の種殻を用いた活性炭生産などの取り組みが広がった。食用菌種の菌床にはクヌギがもっとも成長が良く、次いでニセアカシア、ポプラと続く。しかしクヌギは天然林のため伐採禁止なので、ニセアカシアやポプラが菌床の主原料となっている。菌床には木材チップの他、小麦のふすまも添加する。大戸と呼ばれる100畝以上の大規模なビニールハウスによる菌床栽培を行う農家も増加している。農家収入の60-70%が菌床栽培である。農地の中には、菌床栽培のために遮光したビニールハウスが多く立ち並んでいた。ポプラはかつて炭坑の支柱に利用されていたが、油圧パイプで代替されるようになった。現在は、ポプラの幹は板材として製材され、ポプラやニセアカシアの枝はチップにして合板や食用菌栽培の菌床として利用されている。菌床に用いるニセアカシアのチップは600円/tで買い取られる。使用済みの菌床やトウモロコシの芯は家庭用燃料として利用される。家庭の暖房には石炭も利用される。石炭は500円/tで、一家あたり一冬で2tを消費する。板材は、林業局が管理する木材加工場（平泉県内で40軒）で製材している。合板加工は、2011年から民間企業の吉林森工が林権を持つ農家と契約し、伐採・植林・育林・合板加工の一連の作業を行っている。

山の樹木の利用に関して、国としては、封山育林（伐採を禁止）して緑化を進めたいが、地域としては伐採したいという利益の相反がある。そこで伐採許可制をとり、樹種ごとに伐採周期が決められている。例えば、一般的に油松は42年、ポプラは21年だが、現在は非緑化樹に指定されているため実質規定はない。ニセアカシアには伐採周期の規定はなく郷鎮（地方行政）レベルで伐採許可を出している。山杏は8年周期で伐採している。クヌギは天然林に指定され、伐採は禁止されている。

植林地面積は、山杏67万畝、ポプラ10万畝であり、速成ポプラは1000万株強が植栽された。

これらの経済活動の結果、農家の年平均収入は1600元増加した。

次に平泉県打鹿溝林場にて行われている京津風砂源植林&育林国家プロジェクト拠点を視察した。打鹿溝林場は国有林で面積は189km²である。ここでは主に3つの樹種を植えていた。①コノテガシワ（側柏）：ヒノキ科の常緑針葉樹。緑化用樹種。②リンゴ（国光・寒富士）：3年目から収穫、5-6年でピーク、8年目まで収穫できる。③黄芪（炎症を抑える漢方薬）。林の下にはガチョウを飼育していた。承德市平泉県茅蘭溝満州族モンゴル族村では菌床シイタケの栽培を視察し、自然資源の利活用に関して意見交換を行った。

最後は杏仁を採った後の種殻を用いた炭生産工場を視察した。炭の持つ除湿・消臭機能を活かした商品開発を進めていた。

本調査から、中国の森林では集団林権改革により、農家が森林資源を積極的に利用し、民間企業も林地を借りて森林経営に乗り出している現状が分かった。一方で、中国の森林政策にはいくつかの問題点があることも分かった。造林に対して国からの補助金が400元/畝だが造林実費は1000元/畝かかるため木材の収益を上げるしかない。しかし、ロシアから安価な木材が輸入され始め木材価格が下落した。例えば2007年に柳の木材価格は1000元/立米だったが2015年には300元に下がった。経済圏の拡大により国内林業が打撃を受ける構図は日本と同じであった。また集団林や個人の林地が水源涵養などの公益林（日本の保安林に相当）に指定された場合、15元/畝の公益補助金が出るが60元/畝ないと厳しいとのことであった。

今後は、集団林権改革により、都市と農村の経済格差がどれくらい是正されているのか、また農村から都市への人口流出に歯止めがかかっているのか、詳細に調査する必要があると考えられた。